

目的 昭和59年日本家政学会第36回大会被服部会において、鈴木は「江戸時代の紅花染について」発表した。その発表内容をもとに、短時間に効果的に実習をすることができるよう指導の工夫をし、これを実習「伝承紅花染」と題し、実践に移してきた。

江戸時代の人々が、貴重な紅色素を系統的に、有効に活用した各種の技法を実習することによって、「伝承」の意義を理解しこれを守り育てていく態度を養うことを目的にした。

方法 夏の特別講座として大学生に、カルチャー教室で一般の人達を対象に実施した。実習前、実習後の諸調査から、前記目的が達せられたかその効果を判定した。

結果 1. 実習指導案は適切であったか・・・実習内容の興味度調査や、実習中の質問に対する解答や感想などを総合すると、おおむね短時間の割には、密度が濃く、興味をひいたと解された。

2. 紅花染の色の長が分ったか・・・化学染料による発現色と比較して、妥当性のある表現が大部分をしめていた。

3. 「伝承」の意義について・・・実習前と実習後の考えに差異が見られたかについて調べると、大多数は、伝承に賛意が見られた。

4. 伝承紅花染を守り育てて行けるか・・・その一端を、実習後に「今後の研究問題が見つけられたか」という観点からみると、研究問題を見つけた人は極小数であった。この点については、さらに研究の余地があると思われる。